みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

SER no.132; はじめに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2016-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00006017

はじめに

岸上　伸啓
（国立民族学博物館）

環北太平洋諸沿岸文化の比較研究は，フランツ・ボアズ（Franz Boas）が組織したジェサップ探検調査（1897-1902）を嚆矢とする。その後，米国スミソニアン協会自然史博物館のウィリアム・フィッツヒュー（William Fitzhugh）やイーゴリ・クルプニク（Igor Krupnik），元東京大学の渡辺仁，元京都大学の宮岡伯人，元国立民族学博物館の大塚和義や元北海道立北方民族博物館の谷本一之らが組織した研究プロジェクトにより，比較研究が実施され，成果が蓄積されてきた。また，成果公開の一環として，同地域の先住民文化について米国自然史博物館の展示会「Crossroad of Continents」（1988年）や国立民族学博物館の特別展示「ラッコとガラス玉」（2001年）が開催された。

その後も多くの研究者がこの地域で調査に従事してきたが，米国スミソニアン協会自然史博物館のウィリアム・フィッツヒューやイーゴリ・クルプニクが中心となって実施したジェサップⅡプロジェクト以外，国際的でかつ組織的な比較研究はほとんど行われていない。そのジェサップⅡプロジェクトに，日本から参加したのは谷本一之や井上紘一ら数名のみで，日本人研究者のプレゼンスはあまり大きくなかった。

一方，1980年代以降，日本では言語学者や文化人類学者を中心に環北太平洋地域の諸先住民文化の研究が実施され，成果も蓄積されてきた。しかし，その成果の多くは日本語で発表されるに留まっており，充実した研究がなされているのにもかかわらず，海外の研究者の目に触れ，引用されることはほとんど無かった。このような状況を打開するためにも，日本人を含めた国際シンポジウムを開催し，日本人研究者の研究を海外の研究者に知ってもらうこと，そして環北太平洋地域の諸先住民文化に関する研究の現状を確認し，さらなる発展を目指すことが必要だと考えた。このような経緯で，国際シンポジウム「北太平洋沿岸諸先住民文化の比較研究 ── 先住権と海洋資源の利用を中心に ──」を2014年１月11日から13日まで国立民族学博物館にて開催することになった。

ところで，私は1980年代半ばにカナダのモントリオールにあるマッギル大学人類学部に留学し，カナダ極北地域に住むイヌイットの文化や社会について文化人類学研究を開始した。それ以来，私の専門はカナダ・イヌイット研究である。なぜそのような私が環北太平洋地域の先住民文化に関する国際シンポジウムを企画し，実施するにいたったのかについて，私自身の体験に焦点をあてながら紹介しておきたい。

私が大学院生時代を過ごした1980年代当時，チュコト半島やカムチャツカ半島などのロシア極東地域での現地調査は政治的な理由から実施することが難しく，私自身も北海道からさらに北に広がる先住民文化について研究できるとも，またしようとも考えてい

なかった。しかし1989年に旧ソ連が政治経済の面で自由化をはじめ，環北太平洋地域の一部である北東アジアをめぐる政治状況は大きく変わった。1990年10月に北海道教育大学函館校に専任講師として採用されたが，当時の同大学の学長はアイヌをはじめとする北方先住民の音楽を研究してきた谷本一之先生であった。同大学への赴任と谷本先生との出会いは，私が北東アジアへ目を向けるきっかけとなった。谷本先生は，小樽商科大学の大島稔教授とカムチャツカ半島のコリヤーク民族の踊りや歌など芸能調査を行っており，1994年夏に私は谷本調査隊のメンバーとしてカムチャカ半島西岸にあるレスナヤ村での調査に参加した。その後，私が国立民族学博物館に移動した1996年の晩秋には，大島調査隊のメンバーとしてカムチャツカ半島から北西方向の大陸部に位置するスラウトノイエ村，同半島の中央部にあるエッソ村にて現地調査を行う機会を得た。これらの体験は否応なしに北米大陸とは異なる先住民の世界の存在を私の心に刻み込んだ。

国立民族学博物館でも私はカナダ・イヌイットの調査を継続していたが，大塚和義教授が特別展「ラッコとガラス玉」を開催するというので，実行委員としてアラスカや北アメリカ北西海岸地域の先住民の文化と交易を担当することになった。特別展の準備のため，1997年11月中旬から12月初旬にかけて，さらに1999年の２月下旬から３月中旬にかけて大塚教授とともに米国のアメリカ自然史博物館やシカゴフィールド博物館，アンカレッジ歴史博物館，アラスカ大学フェアバンクス校博物館，カナダのブリティッシュコロンビア大学人類学博物館とロイヤル・ブリティッシュコロンビア博物館，アラートベイのウミスタ文化センターなどバンクーバー島にある複数の先住民族博物館を訪問し，北西海岸先住民やアラスカ先住民の文化や交易に関する標本資料について調査を行った。また，2000年８月下旬から９月上旬にアラートベイで先住民クワクワカワクゥの大型丸木舟や儀礼具，木箱等の標本資料の収集を行った。これらの体験によって，私はイヌイット文化とは大きく異なる北アメリカ北西海岸先住民文化に触れることとなった。

その後，北アメリカ北方先住民による海洋資源の利用・管理・流通の研究のために，2006年にアラスカ州南東部地域からカナダのクイーンシャーロット島にいたる沿岸地域を訪れる機会があった。さらに2006年９月から2013年３月までの間にアラスカ州最北端に位置するバロー村でイヌピアットの捕鯨文化に関する調査に従事した。

以上の体験を経て私は環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関心を寄せるようになった。先住民イテリメン研究を専門とするアラスカ大学フェアバンクス校人類学部のデイビッド・ケスター（David Koester）先生が2009年９月から約１年間，客員教授として国立民族学博物館で過ごした。この時に，私は自分の関心を先生に話したところ，将来，環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する研究プロジェクトやシンポジウムを実施しようということになった。そして，その話しが実現し，2014年１月中旬に国立民族学博物館において国際シンポジウムを開催することになった。

国際シンポジウム開催にあたっては，日本側は私が，外国側はケスター先生が発表者

を決め，また，招へいのための旅費の調達をすることになった。日本側では国立民族学博物館の研究成果公開プログラムと2013年度科学研究費基盤研究（B）「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」（課題番号：21401045，研究代表者：岸上伸啓），外国側では米国科学財団（National Science Foundation）とアラスカ大学フェアバンクス校人類学部から資金を得，実施することになった。当初は国立民族学博物館の研究成果公開プログラムとして開催する予定であったが，人間文化研究機構の機構長裁量経費から全体予算の約半分が支出されることになったので，結果的に人間文化研究機構と国立民族学博物館が共催するシンポジウムとなった（付録参照）。

このシンポジウムへの日本からの参加者は，私自身のほか井上敏昭（城西国際大学），大塚和義（大阪学院大学，国立民族学博物館），加藤博文（北海道大学），久保田亮（大分大学），齋藤玲子（国立民族学博物館），佐々木史郎（国立民族学博物館），高倉浩樹（東北大学），立川陽仁（三重大学），出利葉浩司（北海道開拓記念館），野本正博（アイヌ博物館），羽生淳子（総合地球環境学研究所，カリフォルニア大学バークレー校），山浦清（立教大学），渡部裕（北海道立北方民族博物館）らであった。言語学者の方々は都合が合わず参加できなかったが，呉人恵（富山大学）が，寄稿してくれた。

一方，海外からは，デイヴィッド・ケスター（アラスカ大学フェアバンクス校），オーエン・K・メイソン（Owen K. Mason，コロラド大学ボールダー校），キャサリン・L・リーディ（Katherine L. Reedy，アイダホ州立大学），ベン・フィッツヒュー（Ben Fitzhugh，ワシントン大学），ウィリアム・フィッツヒュー（スミソニアン協会国立自然史博物館極北研究センター），クレア・アレックス（Claire Alex，パリ第一大学），ベネディクト・J・コロンビ（Benedict J. Colombi，アリゾナ大学），チャールズ・メンジーズ（Charles Menzies，ブリティッシュコロンビア大学），トーマス・F・ソーントン（Thomas F. Thornton，オックスフォード大学），シンゴ・ハマダ（Shingo Hamada，インディアナ大学），ジェニファー・クランマー（Jennifer Kramer，ブリティッシュコロンビア大学），スヴェン・ハーカンソン（Sven Haakanson，ワシントン大学付属バーク博物館），ピーター・シュヴァイツアー（Peter Schweitzer，ウィーン大学）ほかが参加した。欧米を代表する第一線の研究者がこのシンポジウムに参加したが，カムチャツカ半島在住のコリヤーク人研究者をビザの関係で招へいできなかったことはまことに残念であった。

このシンポジウムでは，日本人研究者がみずからの環北太平洋地域の先住民文化に関する調査について報告した後，欧米からの参加者が彼らの最新の研究成果を報告し，活発な議論が交わされた。その結果，これを契機に環北太平洋地域研究ネットワークもしくは学会を設立しようということになり，現在，その準備が進みつつある。シンポジウムの主催者の一人として，喜ばしく思っている。

本書は，このシンポジウムに参加した日本人研究者による9件の研究成果を所収したプロシーディング的なものである。本書の構成については，これまでの環北太平洋地域

の先住民文化に関する研究動向を概観した後（岸上論文），考古学研究（山浦論文，加藤論文）と言語学研究（呉人論文）を掲載する。その次に，カナダ北西海岸地域（立川論文）から出発し，アラスカ（井上論文），カムチャツカ半島（渡部論文）を経た後，北海道（野本・岩崎・手塚論文，出利葉論文）に至る地域の順番で諸民族に関する事例研究や研究動向を紹介する。また，本書では，コリャーク／コリヤークやカムチャツカ半島／カムチャッカ半島など民族名称と地名の日本語表記ついては，各執筆者の用法に準ずることにすることをお断りしておきたい。

なお，近い将来，本シンポジウムの最終成果として，英文論文集を出版する予定である。本書が，日本における環北太平洋沿岸地域の先住民文化研究の発展の起爆剤になれば，望外の喜びである。忌憚のないご批判をお願いしたい。